S-face

SFC makes the future through researches

障害者が輝ける新しい社会の形を

塩田 琴美

×

VOL.
033/100
2021.Jun 発行
和の色：青竹色

「義務」から「当たり前」へ
障害者の思いが実現できる社会を創る

2020年オリンピック・パラリンピックの招致決定以降、障がい者スポーツの促進が掲げられ、さまざまな取り組みが行われてきました。しかし、地域の障害者のスポーツ実施率は、低い現状が続いています。スポーツのみならず、就労、教育など、障害者を取り巻く問題は山積しています。塩田琴美准教授は、「障害者の社会参加がより促進されればさらによりよい社会に変わる」という思いを胸に、障害者が当たり前に活躍する社会を目指して研究活動を展開しています。

障害者の農業就労を指標開発でサポート

日本では、障害者雇用を「義務」や「コスト」として捉えている企業が少なくありません。障害があっても、企業の利益に貢献する働き方は十分できるのですが、そのために必要な障害特性の把握、業務負荷のコントロール、採用や人事評価の基準といった指標は、どの業種でも確立できていないのが現状であり、そのことが障害者雇用を妨げる要因にもなっています。

そこで私が取り組んでいるのが、農業と知的・発達障害者をジョブマッチングするための指標開発です。

日本の農業は人手不足が深刻ですが、知的障害者や発達障害者は、働く意欲や能力があってもなかなか就労に結びつきません。また、農業には、繊細さが必要なイチゴの摘果など機械化が難しい作業があり、一方で、障害者の中には、繊細な作業を集中して続けられる特性を持つ人がいます。農作業の特性と障害の特性をそれぞれ分析し、指標を作り、その指標に則って適切にマッチングできれば、双方の課題の解決が期待できるのです。

障害者が農業に就労するメリットは、職業と収入を得ることだけではありません。朝起きて、仕事で体を動かし、夜きちんと眠るという生活習慣が身につき、偏食の改善など食育の効果も期待できます。体を動かして食事もしっかり摂るようになると、健康状態も改善します。こうした効果は、障害者本人に有益であるだけでなく、長期的に見れば医療費の削減など社会的メリットもあると考えています。

なぜ発達障害者は動きがぎこちなくみえるのか

生体科学的研究として、発達障害者の動作や立体認知における視線行動特性の解明を進めています。

これまで、特別支援学校で発達障害児の運動をサポートしてきましたが、子どもたちの動きを観察する中で、動作の模倣や立体を見た通りに再現することが困難であることが分かってきました。

動きを真似るという動作には、視覚からの入力→脳内での情報処理→身体への表出という流れがあります。発達障害者の中でも様々な特性を示し、身体の動きに問題がないケースもありますが、一般的に、発達障害者は動作が非効率的で「不器用」と表現されることが多く、その原因は身体への表出の部分にあると捉えられています。しかし私は、単に身体的な要因だけではなく、動作や立体を認知する視覚情報の入力段階に問題があるのではないかと考え、視線計測システムを使った動作解析などに取り組んでいます。

この研究の成果によって、発達障害の新たな検査手法の開発や、動作改善のアプローチ法に独創的な提言ができるのではないかと期待しています。また、障害者のジョブマッチングでは、障害者個々の特性として、認知や身体の問題を定量的に把握することも重要になるため、就労支援の研究にも成果を活用できると考えています。

Research Projects Involving Students and Enterprises

企業と学生によるプロジェクト研究

グローバル企業と研究会のプロジェクトでは、障害者と健常者がレクリエーションを通して交流するオンラインイベントを開催。学生は、試行錯誤を重ねながら、障害者への情報の伝え方や必要なリスク管理を身に付けていった。さらに、企業が実際に抱える課題に対して、解決策の提言まで行うことで学生の実践力を養い、これからのダイバーシティ社会を支えるリーダーの育成にも繋がっている。

Quantitative Research and Qualitative Research

量的研究と質的研究

実験や計測値に基づく量的研究と、調査などに基づく質的研究の両方に取り組む塩田准教授。研究会の学生に対しては、研究の手法の指導も重視している。「研究テーマへの思いが強い学生ほど、自分の言葉だけで論文を書いてしまう傾向があります」（塩田准教授）。実践的な研究や定性的データを扱う研究をする学生には、客観的な視点や反論を考慮したうえで主張を組み立て、論文を執筆するよう指導している。

Sports for people with disabilities in the community

地域での障がい者スポーツの普及を支援

塩田准教授が所長を務めるこみゅスポ研究所での活動の様子。研究所設立のきっかけは、理学療法士でもある塩田准教授が、「病院のほかに行く場所がない」という若年層のリハビリ患者に出会ったことにある。日本のデイサービスは高齢者を対象にしたものがほとんどで、日常的に若年層の障害者が余暇活動ができる環境はいまだ少ない。障害者のスポーツは、子どもや高齢者もできる生涯スポーツとしても注目されつつあり、今後地域でのさらなる普及が期待される。

障害者のスポーツやリモートワークを支援

日本ではまだ、地域レベルで障害者がレクリエーションを楽しんだり、スポーツをしたりできる“居場所”が圧倒的に不足しています。障害があっても地域で余暇活動を楽しむ場所を作りたいと考え、障がい者スポーツのイベントや指導者育成を行う「こみゅスポ研究所」を設立しました。障害の有無に関わらず、誰もが楽しくスポーツに参加できる環境づくりは、健康増進を図り、一人一人が人生をより楽しむことに繋がると考え、活動を広げています。

さらに2020年、こみゅスポ研究所のグループとして、重度障害者のリモート就労を支援する会社を起業しました。会社の利益は非営利法人であるこみゅスポ研究所に還元し、補助金に頼らずに継続的に事業を運営する仕組みを構築しています。こうしたハイブリッド型のソーシャルビジネスは、すでにアメリカでは主流になってきています。

このような学外での活動には、現場を重視する私の強い意志が反映されています。論文を読み込み、ロジックを組み立てることは大切ですが、論文で明らかになる社会課題をリアルの世界でどう解決していくかは、直接現場に立って考えるほかありません。研究者、教育者、経営者の3軸を有機的に繋いで社会課題の解決を図るため、これからも現場重視の姿勢を貫いていくつもりです。

Profile
塩田 琴美
慶應義塾大学総合政策学部准教授。首都大学東京（現・東京都立大学）大学院保健科学研究科博士後期課程修了。株式会社CMU Holdings代表取締役兼CEO、一般社団法人こみゅスポ研究所所長。学内外を問わず、スポーツ、教育、医療・福祉分野の多領域でアグレッシブな活動を展開している。

詳しくはWebサイトへ
詳細インタビューや動画もご覧いただけます

S-face　検索

慶應義塾大学 湘南藤沢キャンパス（SFC）
慶應義塾大学 SFC研究所
慶應義塾大学 湘南藤沢事務室 学術研究支援担当
〒252-0882 神奈川県藤沢市遠藤5322
Tel: 0466-49-3436（ダイヤルイン）
E-mail: info-kri@sfc.keio.ac.jp